



# 上菅田中学校だより

第6号 平成29年10月2日発行

発行責任者 校長 関 恭雄

上菅田中学校 学校教育目標

- ◆学びを深め、実践力を養う
- ◆互いを認め、自分を伸ばす
- ◆豊かな心と健康な体をつくる
- ◆地域の一員、国際社会の一員  
であることを自覚し、行動する

## 上菅田特別支援学校との交流会

9月14日に本校2年生と上菅田特別支援学校中学部2年生との交流会を実施しました。特別支援学校の生徒全員の自己紹介の後、特別支援学校の先生による車いす介助の方法の説明があり、特別支援学校の生徒の協力のもと、車いすの体験をさせていただきました。最後に、上中 YOSAKOI ソーランを2年生全員が披露しました。特別支援学校の生徒たちも鳴子を手に参加し、YOSAKOI ソーランのリズムを一緒に楽しみました。同じ上菅田のまちで学ぶ中学2年生の仲間として、交流を深める良い機会となりました。



## 上中 YOSAKOI ソーランの始まり

上中の伝統になっている上中 YOSAKOI ソーランは、いつから始まったのでしょうか。古い校誌をひもといて、調べてみました。

今から16年前、当時の2年2組の生徒が、自然教室のキャンプファイヤーでクラスの出し物として YOSAKOI ソーランを発表しました。それがきっかけで、地域の施設訪問や学校行事の際にソーランを発表したらどうかという声が2年生の先生方からあがりました。そして、2年生の有志生徒の募集が行われ、平成14年1月に本格的な練習が開始されました。ビデオを見ながらの猛練習が続き、その成果は3月の3年生を送る会で発表され、大好評を博しました。その時に着用した法被（半纏）は、西区の老松中学校からお借りしたものでした。

その2年生が3年生に進級すると4月の新入生を迎える会や5月のPTA総会でも3年生有志によるソーランが披露されました。そしてついに、秋の体育祭の3年生の正式演技として採用されることになり、「上菅田」の文字を染め抜いた上中 YOSAKOI ソーランの法被も3年生全員分揃えることになりました。ソーランは地域でも評判となり、上菅田や笹山や西谷のお祭りにも招待され、1~3年生有志による法被姿でのソーランが披露されました。体育祭本番でのソーランも大成功し、それ以来、上中の伝統として定着していくことになりました。

これからも上中 YOSAKOI ソーランの伝統が受け継がれていくことを願っています。

そして、いつか、「全校ソーラン」を実現することが私の夢のひとつです。

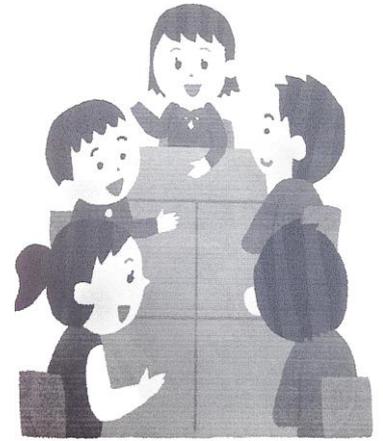


# 道徳

今年度、上菅田中学校は横浜市の道徳授業力向上推進校の一つとして道徳の授業力向上に取り組んでいます。6月の専門家を招いての研修会と各学年での指導案検討を経て、9月には校内研究授業を実施しました。10月27日には、市の道徳公開授業研究会が開催され、全クラスで道徳の授業が公開されます。1月には、保土ヶ谷区の道徳研究会の公開授業も行われます。

道徳教育は、教科の授業や特別活動、日常の生徒指導など学校の教育活動全体を通して行うものです。その要となるのが週1時間の「道徳の時間」ですが、平成27年3月の学習指導要領の一部改正により「**特別の教科 道徳**」と新たに位置づけられ、道徳教育の一層の充実が求められることになりました。その背景には、いじめ問題、社会全体のモラルの低下、人との直接的関わりや社会体験の不足等があげられており、学校教育の中で行う道徳教育の必要性がより高まっています。

道徳の時間は、他の教科の時間に比べて、<sup>けいし</sup>軽視されがちでした。読み物資料の感想やVTRを視聴しての感想を書くだけの授業になってしまったり、中学生にはわかりきった、望ましいと思われることを言わされたり、書かされたりする授業になってしまいがちな面もありました。これから目指していくのは、「**考え、議論する道徳**」の授業です。答えが一つではない道徳的な課題を生徒が自分自身の問題と捉え、向き合い、議論する中で多様な考え方や感じ方と出会いながら自己を見つめ、考えを深めていけるような授業づくりが求められています。



上菅田中学校屋上から眺めた上菅田のまち  
上菅田小学校方面



笹山小学校方面



上菅田特別支援学校方面



**上菅田地区まちづくり協議会 設立総会**に出席させていただきました。「**住んで安心 暮らして安全 生き生き暮らす上菅田**」をスローガンに掲げたまちづくりプランが承認され、今後、市長から正式な認定を受け、地域の皆様が主役となり活動が進められていくとお聞きしました。

「歩行者空間の安全性の向上」「地域交通の充実」「水辺・緑・まちなみ環境美化」の3観点を中心に展開するまちづくりの活動に、**中学生が、地域の一員としてどのように関わりを持ち、協力していけばいいのか**を考えていくことの必要性を感じました。